宗教研究における「聖典」再考

天理大学名誉教授
おやさと研究所嘱託研究員
澤井　義次　*Yoshitsugu Sawai*

序―問題の所在―

現代の宗教研究において、特に1990年代以降、従来の宗教概念が再検討されてきた。宗教学が近代西洋で成立したこともあって、これまで半ば無意識に前提とされてきた主要な宗教概念は、近代西洋の宗教の中でも、特にプロテスタンティズムの枠組みをふまえて構築されたものであった。現代の宗教研究において、再検討すべき主要な宗教概念の一つに、「聖典」（scripture）の概念がある。聖典とは宗教伝統において、教義と信仰の指針として権威をもつ言語テクストである。聖典の読誦などをとおして、信仰者は教義と信仰の理解を深めていく。宗教伝統における聖典の意義については、すでに数多くの研究が蓄積されてきた。

ただ、聖典研究において、これまで取り上げられてきたのは、専らエクリチュール（書き言葉）としての聖典であった。それに対して、長年にわたってその重要性が認識されながらも、パロール（話し言葉）としての聖典については、ほとんど本格的な研究がなかった。この点について、筆者は以前、少しばかり論じたこともあるが[(1)]、この小論では、現代の宗教研究の動向に注目しながら、宗教言語としての「聖典」のエクリチュールとパロールの関わりを手がかりとして、宗教伝統における聖典の意味構造を考察してみたい。

「語られる聖典」としての『聖書』

聖典とは、世界のそれぞれの宗教伝統において、教義や神話さらに戒律などを教示するものである。それは聖なるテクストとして権威をもっている。世界の宗教伝統において、「聖典」の概念は、宗教学的に自明なもので、全く議論の余地のないものと思われてきた。「聖典」を意味する英語 scripture は、ラテン語の scriptura に由来しているが、この語は語源的には、書く行為あるいは書かれたものを意味している。

西欧のキリスト教文化圏では、大文字のSで始まる単語 Scripture と言えば、それは伝統的に、神によって啓示された聖なる書物、すなわちユダヤ・キリスト教の『聖書』（Bible）を意味してきた。しかし、19世紀後半から20世紀にかけて、比較宗教学という学問が成立すると、小文字のsで始まる単語 scripture は、ユダヤ・キリスト教伝統においてばかりでなく、イスラームや仏教などの世界の諸宗教伝統においても、信仰者たちに教えを教示する書物すなわち「聖典」（scripture）という宗教概念の一つとなった。しかし、その宗教概念は、どうしても『聖書』がもつキリスト教的なイメージを暗黙裡に含意していた。

今日、私たちのだれもが、『聖書』はキリスト教の聖典であることはよく知っているが、私たちの常識において、無意識的に前提となっているのは、『聖書』が「書かれた聖典」（written scripture）すなわちエクリチュールとしての聖典であるということだ。ところが、西洋のキリスト教伝統において、エクリチュールとしての『聖書』が出現したのは、むしろ比較的に新しい出来事であった。特に19世紀以降、西洋社会における印刷文化が、人々と書物の関わりを大きく変えた。

しかし、19世紀以前、西洋のキリスト教文化に生きた一般の人々にとって、『聖書』は声に出して読んでもらい、聞くものであった。『聖書』を読むことができたのはキリスト者のごく一部にすぎなかった。キリスト教の伝統において、重要であったのは「語られる聖典」（spoken scripture）すなわちパロールとしての『聖書』であった。私たちはとかく現代的な視点から、当時の文化的背景を考慮することなく、キリスト教伝統における『聖書』の意義を捉えがちであるが、それではキリスト教史において、キリスト者の信仰にとって、パロールとしての『聖書』が担ってきた重要な役割を見過ごすことになりかねない。キリスト教の伝統と同じように、「聖典」をもつどの宗教の歴史においても、聖典の言葉を読むことができたのはごく一部の人々であった。

仏教経典―パロールからエクリチュールへ―

さて、具体的に「聖典」概念を再検討していくに当たり、まず、仏教経典に関する最新の研究に少し触れておきたい。仏教は言うまでもなく、およそ2500年前のインドに誕生した。その仏教の教えが、19世紀のヨーロッパにおいて、インド・ヨーロッパ語という言語世界が認識されるようになり、近代仏教学すなわち現代の仏教学の研究対象となったことは周知の事実である。わが国では、明治以前の伝統的な漢籍中心の仏教研究の蓄積に、近代西洋の文献学的な方法が接ぎ木され、明治以降、新たな仏教研究が展開された。ただし、仏教学が研究対象としたのは、エクリチュールとしての経典であった。仏教学研究において、仏教経典に関する重厚な研究が長年にわたって数多く蓄積されてきたが、パロールとしての経典に注目した本格的な研究はこれまでほとんどなかった。

こうした仏教学の学問状況において、「聖典」概念の再検討の一例として、仏教学者の下田正弘（東京大学）の著書『仏教とエクリチュール』（東京大学出版会、2020年）を挙げておきたい。下田はこれまでも、大乗仏教の経典の成立について、パロールとしての経典の重要性を指摘してきた。この著書では、哲学者のジャック・デリダ（Jacques Derrida）のエクリチュール論、ハーバード大学教授で世界的に有名であった宗教学者のウィルフレッド・C・スミス（Wilfred C. Smith）や、彼の弟子で同大学教授の宗教学者ウィリアム・A・グラハム（William A. Graham）の聖典論などに言及しながら、新たな大乗仏教経典に関するパースペクティヴを展開している。下田によれば、ブッダの教えの伝承形態はパロールからエクリチュールへ、すなわち、口頭伝承から書写へと移行した。そのことによって、経典のテクストが「発信者の思考の痕跡が刻みつけられた場」であると同時に、「受信者の思考の痕跡が刻まれる場」になっていったという[(2)]。このように経典のテクストを捉えるパースペクティヴは、聖典のパロールとエクリチュールの関わりを手がかりとして、世界の諸宗教伝統における聖典理解を再考するうえで、貴重な論点を提示していると言えるだろう。

［注］

（1）澤井義次『天理教人間学の地平』天理大学出版部、2007年、56～58頁参照。

（2）下田正弘『仏教とエクリチュール』東京大学出版会、2020年、324～326頁。